

原罪は人間に何をもたらしただのか

——トマス・アクィナスと

ドゥンス・スコトゥス——

上智大学中世思想研究所主催講演会



2018 3/3 Sat. 13:20 - 16:50 事前予約不要・入場無料

会場：上智大学四谷キャンパス 2-509 教室（2号館5階 開場 13:00）

13:20-13:25 開会挨拶

13:25-15:30 ご講演

山口雅広（龍谷大学）

トマス・アクィナスにおける原罪と救済の意味について

辻内宣博（東洋大学）

ドゥンス・スコトゥスにおける原罪と倫理

15:45-16:45 コメント 矢内義顕（早稲田大学）

／質疑応答 司会 佐藤直子（当研究所所長）

16:45-16:50 閉会挨拶

連絡先：上智大学中世思想研究所 Tel：03-3238-3822 / E-mail：imdthght@sophia.ac.jp

原罪は人間に何をもたらしたのか

——トマス・アクィナスとドゥンス・スコトゥス——

ご挨拶

キリスト教では「神の像」として人間を捉え、その尊さと限界とをともに主張してきました。しかしその人間が、得体の知れない根源的な弱さを併せ持つこともまた、とりわけ西欧のキリスト教では、「原罪」の名のもとに意識されておりました。今回の講演会では、中世スコラ学において原罪論がいかに展開されてきたかを、二人のスコラ学者、トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, 1225 頃 -1274) とヨハネス・ドゥンス・スコトゥス (Johannes Duns Scotus, 1265/66-1308) に焦点を当てながら考えていきたいと存じます。

スコラ学とは文字通り「学校」(school) で論証的になされた知的営為です。「都市」の拡大とアリストテレス哲学の受容、さらには教父から同時代の著述家に至るテキストの蓄積・整理・共有がこれを支えておりました。そうした「学校」はやがては「大学」へと発展し、トマスもスコトゥスも大学の神学部で教鞭を取ります。一見、無味乾燥な彼らのテキストは、その実、長く論じられてきた諸問題と対峙しようとする気概に満ち溢れています。

神学部での講義・討論にあっても、「原罪」は、避けて通ることのできない重要なテーマでありました。トマスとスコトゥスの原罪理解を通して、原罪論が自由意志と恩恵との関わりという大きな問題領域の中で主題化されてきたことを、また救いに向けての徳の醸成というキリスト教的倫理観の基礎を築くものあることを、さらには「原罪ありき」の視点で人間を捉えなおすことの現在の意味を、皆様と考える時間を共有できましたら幸甚です。一般の方々のご参加も歓迎いたします。

上智大学中世思想研究所所長 佐藤 直子

講演者・コメンテーター：主要業績

山口雅広 (龍谷大学文学部講師)：「トマス・アクィナスにおける選択の自由——その晩期における議論の意味」『中世思想研究』第 47 号 (中世哲学会、2005 年)、「キリスト教倫理から生命倫理へ——ポール・ラムジーの場合——」『神と生命倫理』(晃洋書房、2016 年)、「中世の二人の思想家とリパブリカニズム」『倫理学研究』第 47 号 (関西倫理学会、2017 年)、他。

辻内宣博 (東洋大学文学部准教授)：「感覚認識と知性認識の境界線——『デ・アニマ問題集』におけるビュリダンの認識理論」『中世思想研究』第 48 号 (中世哲学会、2006 年)、「14 世紀における時間と魂との関係——オッカムとビュリダン」『西洋中世研究』第 3 号 (西洋中世学会、2011 年)、「不対等な関係における友愛の在処——ビュリダンの『ニコマコス倫理学問題集』第 8 巻」『中世哲学研究』第 30 号 (京都大学、2011 年)、他。

矢内義顕 (早稲田大学商学学術院教授)：上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成 10 修道院神学』(監修、平凡社、1997 年)、R・W・サザーン『カンタベリーのアンセルムス——風景の中の肖像』(翻訳、知泉書館、2015 年)、H・キュンク『キリスト教は女性をどう見てきたか——原始教会から現代まで』(翻訳、教文館、2016 年)、G・プラスガー『カルヴァン神学入門』(翻訳、教文館、2017 年)、他。

* 閉会后、ささやかな懇話会がございます。どうぞおいでください。



画像出典

トマス・アクィナス (左)、ドゥンス・スコトゥス (中央) André Thévet, *Les Vrais Portraits Et Vies Des Hommes Illustres*, 1584.

ミケランジェロ『原罪と楽園追放』(右) バチカン・システイーナ礼拝堂